

世界政治研究会の魅力

三牧聖子（同志社大学）

昨今のアカデミアでは、研究者は目に見える「成果」を定期的に出すべきだ、という風潮がいよいよ強まっている。こうした風潮に、世界政治研究会はことごとく反している研究会だと改めて思う。3時間という長丁場。1時間ほどの報告の後、参加者全体による討論が延々と続く。そこでの議論は、成果物として刊行されることは想定されていない。しかし、まさに「成果」にしなければならないという縛りがなかったことが、世界政治研究会での、独特で豊かな議論を可能にしてきた一つの大きな理由だと思う。

研究会の参加者は、報告テーマに近い研究をしている人が多くはなるが、門外漢のため他の研究会であれば、聴きに行くのはさすがに気が引けるけれども、世界政治研究会であれば興味の赴くまま参加できるという研究会の常連さんもいるため、とても多様な構成になる。こうしたよい意味での敷居の低さも世界政治研究会の魅力だろう。近い分野を研究していて、その分野での常識的なことを共有している人たちとの研究会は、それはそれで楽しいし、有意義だ。ただ、そうしたメンバーとの間ではもはや常識とされているあまり、問われすらしらない前提があったりもする。そうした前提について、根本的な質問が飛び交うことも、世界政治研究会の魅力だ。

そのことを実感したのは、第一次世界大戦後のアメリカで発展した戦争違法化運動について報告したときだ。この運動は、シカゴの弁護士、サーモン・O・レヴィンソンが始めたもので、侵略戦争のみならず、自衛戦争や侵略に対する制裁にも反対したところに特徴があった。当時のアメリカは、アメリカ同時多発テロ事件(2001)を受けて、「テロとの戦い」を宣言し、アフガニスタンや各地で対テロ掃討作戦を実行し、多くの市民の犠牲を生んでいた。2003年には、後になかったことが判明する大量破壊兵器保持の疑いでイラクへの攻撃を開始し、それを正当化する議論として「先制攻撃」論なるものも真面目に議論されていた。こうしたアメリカの姿に疑問と怒りを感じていた自分には、戦争違法化運動のような、徹底的な非戦の運動が過去アメリカに存在したことはとりわけ魅力的に感じられたのだ。しかし、研究会での議論では、むしろ、戦争違法化運動の限界に焦点があてられた。同運動もまた、アメリカ外交を連綿と特徴づけてきた単独行動主義から自由ではなかった。それは、諸国家と一緒に平和をつくっていくというよりは、「特別な国」アメリカの導きで平和をつくるという独善的な前提に立っていた。また、当時多くの地域が植民地支配下にあった非西洋世界からみれば、主権国家間の戦争だけを問題視し、それが克服されれば平和が実現されると考える戦争違法化運動は、いかにも欧米発の、限界を伴った平和運動だった。こうして、アメリカを十分に批判的に見ていると奢っていた自分の中にあった「アメリカ中心主義」が照らし出されることになったのである。

学務やその他の業務で忙しくなる一方の毎日で、世界政治研究会に参加できていた頃の贅沢な時間がとても懐かしくなる時がある。その時間は戻ってはこないが、今の私の研究者人生を支える、一つの大事な支柱であり続けている。研究会を続けてきてくださった石田憲先生に、心からの感謝を捧げたい。